

平成19年度受賞パンフレット



“往来”と“all right”

—都市と農山漁村の共生・対流表彰事業—

第5回 オーライ!ニッポン大賞



第5回 オーライ！ニッポン大賞

本表彰事業は、今年度で第5回目となりました。今年は全国各地から109件（オーライ！ニッポン大賞84件、ライフスタイル賞25件）の応募を頂きました。

また今年度は、昨年度に引き続き、都市と農山漁村の共生・対流という観点において類似性の高いと思われる組織や民間団体が実施されている表彰事業との連携を試み、優良な活動事例をご推薦して頂くことができました。

全体の感想としては、「子どもたちの環境教育や生きる力の醸成などを目的に農山漁村を舞台とした体験型教育旅行の受け入れを行う活動」、「広域的に連携して、豊富な地域資源を最大限に活用した交流事業に取り組む活動」、「NPO組織など中間的な立場において都市部と農山漁村を結び付けている活動」、「集落や地域が一致団結し、都市住民と地域環境や農地の保全活動等を行いながら集落維持を目指す活動」などの事例が目立ちました。

また高等学校など若い世代による農山漁村地域との交流事例や、廃校等を利活用した地域の雇用を促進する事例、地域や集落の自立を目指した産業興しの事例など、現在の世情に応じた多様な事例の応募を頂き、都市と農山漁村の共生・対流の取り組みの輪が着実に広がり、活発に推進されているという手ごたえを感じました。

審査委員会では、審査基準（*）7項目に基づき、各審査委員が熱心に議論を行い、特に「都市と農山漁村との行き来が活発であること」、「活動の内容が充実しており、地域内外に波及効果を生んでいるもの」、「活動の内容が他の地域のモデルになるような取り組みであること」などという点を重視して各賞を選定しました。

しかしながら、応募の内容はどの取り組みも大変優れたものであり、オーライ！ニッポン大賞グランプリ（内閣総理大臣賞）をはじめ、オーライ！ニッポン大賞、審査委員長賞の選定にあたっては、各審査委員からの活発な意見が交わされ、受賞地区を絞り込むことは大変な作業となりました。

結果的には、受け入れ側の取り組みである「幡多広域観光協議会（高知県四万十市他5市町村）」が、安全で信頼性の高い体験プログラムを提供するため、本協議会がコーディネート組織となり、各市町村の体験型観光研究会と受入団体・個人等がネットワークを形成し、教育旅行という観点をいち早く打ち出し、地域資源と農林漁業、そして人材を結びつけた多種多様な体験プログラムを開発し、500名のインストラクターにより、年間2000名を超える子ども達を受け入れる活動が、地域に大きく貢献している点が評価され、グランプリに選ばれました。

このほか、惜しくもグランプリには届かなかったものの、地域・企業・大学・行政との幅広いネットワークを活かし、都市農村交流事業を始め、森林資源の活用、箱膳による食育事業など、地域の資源を活かした事業展開している「特定非営利活動法人えがおつなげて」、豊かな若狭湾の資源を活かした体験型観光事業によって漁村民宿の活性化に繋がっている「社団法人若狭三方五湖観光協会」、伊座利校の統廃合をきっかけに住民の一人一人が地域おこしに立ち上がり、その結果が人口増に繋がっている「伊座利の未来を考える推進協議会」など、いずれも優れた取り組みを展開しており、高い評価を受けました。

また本表彰事業の趣旨にご賛同いただきました連携表彰事業からは、地域を元気にし、真に豊かな日本を創造したいという思いのもと、「場所文化の創造」の独自に考え方で、地方と都市の人々の新たな交流の確立等を促し、地域への新たな資金流入と域内での資金循環の仕組みを構築し、地域の自立を目指す「場所文化フォーラム」（市民が創る環境のまち“元気大賞”）、日本のグラウンドワーク活動の先駆者で住民・企業・行政が連携して、地元の湧水を活かした水環境整備を中心にふるさと原風景を取り戻している「三島市」（優秀観光地づくり賞）をグランプリの候補としてご推薦いただきました。

受賞団体の取り組みは、今後の都市と農山漁村の共生・対流促進モデルとなるとともに、今後一層の発展が期待されております。また、今年度の選考にあたっては、僅差で入賞を逃した事例が数多くありました。また取り組みの期間は短いものの、今後の展開に大いに期待したい取り組みもありました。より磨きをかけて、参加の輪を広げながら、再度挑戦を期待しています。

平成20年3月12日

オーライ！ニッポン大賞審査委員会 委員長 川勝 平太
（静岡文化芸術大学 学長）

（*）オーライ！ニッポン大賞 審査基準

- ア 農山漁村地域を舞台とした新たなライフスタイルの提案、普及に関する取り組みであること。
- イ 地域の個性を生かした取り組みであること。
- ウ 農山漁村地域を活性化する効果があること。
- エ 都市側、農山漁村側双方の住民の参加を促進する取り組みであること。
- オ 長期的な取り組みの実績があること。
- カ 効果が持続して発現すると見込まれること。
- キ 他の地域における応用性に富んでいること。

オーライ！ニッポン大賞 グランプリ

内閣総理大臣賞

は た こう いき かん こう きょう ぎ かい 幡多広域観光協議会

こうちけん しまん としほか しちようぞん
高知県四万十市他 5 市町村



オーライ！ニッポン大賞
グランプリ

講 評

四万十川が流れる高知県南西部の幡多地域は、日本有数のへき地であることから、豊かな自然資源環境、文化や歴史を始め、日本の原風景が色濃く残る地域である。その幡多地域において6市町村が連携し「なんにもないのになんでもある」をテーマに、教育旅行を中心とした都市と農山漁村の交流活動を展開している。

平成7年に全国に先駆けて環境体験型教育旅行の受入組織として本協議会を設立。広域エリアの「総合受入窓口」として誘致から受入、精算まで一括する組織として活動を行っている。各地域の体験型観光受入研究会組織や個人とのネットワーク化も充実し、自然環境を活かしたアクティビティ、農林水産業体験など、現在は100を超える体験プログラムを広域的に提供している。また、子ども達を受け入れる家庭も100件を超え、更に増加傾向にあり、この事をきっかけに、農家・漁家民宿の開業に繋がるケースも出てきている。またインストラクターも幡多地区全体で500名を超えるなど、充実した体制で受け入れている。平成19年度受入団体数22、受入数2,355名になり、その直接経済効果は、5,000万円を超えている。

安全で信頼性の高い体験プログラムを提供するため、コーディネート組織（幡多広域観光協議会）、各市町村の体験型観光研究会と受入団体・個人等がネットワークを形成し、情報の共有や、講習会の開催、アドバイス、意見交換会などを通じてメニュー作り、人材・資源発掘など様々な面でお互いが協力し合っている。

教育旅行という観点をいち早く打ち出し、地域資源と農林漁業、そして人材を結びつけた多種多様な体験プログラムを開発し、500名を超えるインストラクターにより、へき地でありながらも、年間2,000名を超える子ども達を受け入れる活動が、地域に大きく貢献している点が高く評価された。

オーライ！ニッポン大賞

とくてい ひ えい り かつ どう ほう じん
特定非営利活動法人

えがおつなげて

やまなしけん ほくと し
山梨県 北杜市



講評

特定非営利活動法人えがおつなげては、山梨県北杜市須玉町増富地区に活動拠点をおき、構造改革特区「増富地域交流振興特区」の認定のもと、地域と多様な組織と連携し、都市農村交流プログラムにもとづく多面的な事業を展開している。

平成15年当時の増富地区は耕作放棄地62.3%、高齢化率58.4%で、集落の維持が困難になりつつある状況であったが、構造改革特区の指定をきっかけに、地域資源を有効に活用した持続可能な農村地域社会を再生し、地域活性化につなげていこうと、本NPOが遊休農地約3haを賃借。都市部からの農村ボランティア等の参加者も含めて7500人が、農地の開墾や農業体験、農村活性化のためのワークショップなどに参加している。

このような取り組みは農山漁村のみならず都市における社会問題のバランス是正に有効な手法と考え、山梨、東京、神奈川、埼玉、千葉などのメンバーが8つの委員会を構成し、温泉施設の運営、バイオマス推進、森林資源の活用、箱善による食育事業、都市農村交流会等、各委員会がそれぞれ地域開発事業を展開している。その他、大学や企業とのパートナーシップも進め、都市のオーガニックスーパーが参加する共同農場運営（トウモロコシ1万本産直農場）や企業のCSR活動の受入（遊休農地の開墾活動）、東京農工大学との地域にあった小水力発電なども進めている。更に2008年夏からは関東1都10県にまたがるネットワークで関東ツーリズム大学開校に向けて準備を進めている。

本NPOの活動は、行政、大学、企業など多様な主体と連携し、持続可能な農村地域開発事業に取り組み、一定の成果を上げている。また、活動拠点での事業活動を踏まえて、より広範囲での事業展開を行うほか、都市との交流による地域の活性化や、地域再生に関わる人材育成まで目指している点などが評価された。

オーライ！ニッポン大賞

しゃだんほうじん

社団法人

わかさ みかたご こかんこうきょうかい

若狭三方五湖観光協会

ふくいけん わかさちょう
福井県 若狭町



オーライ！ニッポン大賞

講評

若狭町は平成17年3月の合併により誕生した町で、福井県南西部に位置し、若狭湾を始めラムサール条約に登録された「三方五湖」や、登山者に人気の「三十三間山」、名水百選に選ばれた「瓜割の滝」、中世以来の宿場町である「熊川宿」など、豊かな海・湖・里の資源に恵まれた地域である。

若狭三方五湖観光協会では、平成元年に岐阜県内の中学校から要望のあった大敷網見学の旧三方町で受け入れた事をきっかけに、豊かな資源を活用した体験型観光事業に着手。県外中学生などを対象として、5～7月の間に1泊2日、あるいは2泊3日の行程で行う「海の体験学習（定置網見学、釣り、干物作りなど）」は、若狭町常神半島4地区の漁村民宿に宿泊して行われ、平成19年度は44校5400人が訪れるなど、閑散期の漁村民宿の活性化に大きな役割を果たしている。

平成19年度から個人客を対象に、「若狭・三方五湖 まるかじりツーリズム」を本格始動させている。地元の湖・海・里の幸を自分で取って自分で食べる「自捕自食ツアー」や、語り部が若狭の文化を語りつつ、目の前で取れた湖・海・里の幸を「前代未聞」に食べる「若狭人なりきりツアー」など、これまでの経験を活かし、他地域にはない体験プログラムを作成している。

県外中学生の漁業体験学習を取り入れた教育旅行の受け入れを契機に、沈滞気味だった漁村民宿の活性化を図り、さらに地域の豊かな海・湖・里の資源を活用した個人客を含む、観光受入体制を創意工夫により整えている。

またこれまでには地元漁師（民宿経営者）が活動の中心を担ってきたが、事業展開を図る上で必要な企画・運営にかかわる人材のネットワーク化をすすめ、地域特性にもとづく体験プログラムを新たに創出し、観光事業の発展を支えている点が評価された。

オーライ！ニッポン大賞

いざり みらい すい しんきょう ぎ かい 伊座利の未来を考える推進協議会

とくしまけん み なみちよう
徳島県 美波町



講 評

伊座利地区は、徳島県南東部に位置する美波町の東端に位置し、入り組んだ海岸線と三方を山に囲まれた小さな漁村集落である。かつては多くの人々が住んでいた伊座利も、過疎と少子・高齢化により人口が100人を落ち込み、人口減とともに、子どもの数も激減し、伊座利小学校・由岐中学校伊座利分校（通称：伊座利校）の統廃合が話題となった。

その際、地区のシンボルである学校が無くなると集落存亡にかかわると、地域住民の中で危機感が高まり、「学校の灯火を消すな」を合い言葉に、伊座利校の存続を掲げて、住民が一体となって自主的・創造的な地域おこしに立ち上がり、草の根的なむらづくり活動を開始している。

最初に手がけた漁村留学交流イベント「おいでよ海の学校へ」を契機に、地域の活性化と持続的な発展を推進するため、平成12年に子どもからお年寄りまでの全住民で構成する「伊座利の未来を考える推進協議会」を結成。東京、大阪、徳島市内などでのPR活動や地域資源を題材にした体験活動、休業中のキャンプ場の再生復活など、多彩な交流促進活動に積極的に取り組み、交流の輪は大きく広がり、関西や首都圏、徳島市在住者を中心に構成する「伊座利の未来を考える応援団員」は1000名にのぼる。

また伊座利の自然を守り、ブランド化を図るために、「ゴミ・タバコなどのポイ捨てはやめよう」という独自の規定を設け、海岸や川・道路の清掃を全住民で行っている。

これらの結果、活動当初約100人だった人口が、現在約130人に増加。13年ぶりに赤ちゃんが誕生したほか、若者の定住、児童生徒数の増加、漁師の女性が運営する「イザリcafé」の開業などに結びつくなど、地域に活気と賑わいが戻ってきている。

集落存亡の危機を地域住民が一体となり、都市の児童生徒の漁村留学の受け入れや地域外の応援団を組織することで、集落再生の展望を切り開いている。またそれらを契機に、地域の自然環境保全、さらには女性起業によるコミュニティ・ビジネスおこしに繋がっているなど、波及効果が表れている点が評価された。

オーライ！ニッポン大賞グランプリ候補

*オーライ！ニッポン大賞グランプリ候補とは、都市と農山漁村の共生・対流の観点から、より多様な活動事例を紹介する事で、国民運動の推進に資することを目的に、企業・団体・各省が実施する表彰事業と連携し、その中から、「オーライ！ニッポン大賞」の内容として推薦された事例です。

ばしょぶんか とうきょう とかち 場所文化フォーラム (東京 / 十勝)

とうきょうと なかのく ほっかいどう おびひろし
東京都 中野区 / 北海道 帯広市



オーライ！ニッポン大賞
グランプリ候補

講評

場所文化フォーラムは、地域を元気にし、真に豊かな日本を創造したいという思いを持った有志が2003年夏に設立した任意団体。「場所文化の創造」によって、人々の新たな交流（地方と都市の新たな関係性の確立等）を促し、地域への新たな資金流入と域内での資金循環の仕組みを構築し、場所（地域）の自立（経済の活性化と関与人口の増加、持続可能性の確保等）を目指している。

日本の豊かさの源である一次産業（特に農業）の地域における価値を再確認し、商業との融合によって成立する持続可能な地域経済の在り方を全国各地域との直接的な交流（場所文化ツアー）を深めながら検討している。また、各地域が歴史的に紡ぎだしている文化・風土を再発見し、その再創造のために、場所に閉じることのない都市と地域の新たな関係と、それを具体化するためのビジネスファイナンスモデルを模索し自己責任によって実践している。

本フォーラムのメンバーは、北海道から九州、会社員、公務員、銀行員、大学教授、建築家等と多岐に渡り、幅広い人的ネットワーク（現在50名強）をコアに、月例の定例勉強会（場所文化を語り・考える）、年数回の場所文化ツアー（場所文化を感じる・気づく）、各種交流会や講演（場所文化を伝える・創る）などの活動を重ね、その一つの具体的なモデル、かつ情報発信基地として、丸の内国際ビル地下1階に場所文化レストラン「とちの...」をオープン。都市と地域の対等かつ思いある交流を生む場所であり、志あるお金の流れによる持続可能な新しいモデルの仕組みに挑戦。将来的な他地域展開などを展望した新しいビジネススキームとしての確立を目指している。場所文化ツアーでの成果も、山梨県、高知県等でも発現しているなど、活動の幅を広げている。「Ecojapancup2007/ライフスタイル部門/第7回市民が創る環境のまち元気大賞2007」（(特定)持続可能な社会をつくる元気ネット主催）にて、大賞を受賞。

オーライ！ニッポン大賞グランプリ候補

みしまし まちじゅう じぎょう 三島市（街中がせせらぎ事業）

しずおかけん みしまし
静岡県 三島市



講評

古くから富士山の伏流水が街中に湧きだす「水の都」として知られていた三島市は、1960年代以降の工場進出により、湧水が減少し水辺の環境は悪化、市の中心部を流れる源兵衛川は汚れた川のたたずまいとなった。こうした状況を憂い、1990年代初めふるさとの原風景を取り戻そうと市民が立ち上がり水環境の再生活動が始まり、今では子供達が水遊びをする姿が日常的に見られるまでの成果を上げている。

街中せせらぎ事業地区は、昭和40年代に枯渇した源兵衛川を始め、市内5河川を市民・企業・行政が協働できれいな水の流れる快適エリアに変貌させ、回遊性をキーワードに水と緑と文化の彩りのある市街地に再生した活動である。この取り組みの中心に「NPO法人グラウンドワーク三島」があり、市民や企業とのコミュニケーション、行政との調整役を担いながら、我が国でも先駆的に英国発祥の市民・企業・行政のパートナーシップによるまちづくりであるグラウンドワーク手法を導入。これを機に住民が街の景観や水環境について議論し、対応策を検討するなどを経て、源兵衛川を都市景観重点整備地区に指定し「景観マニュアルの策定」や「補助制度の設置」を行い、これを桜川沿い等に広げた。

また、市民協働による「アダプトプログラム」や「街並み協定づくり」、「せせらぎウォーク」や「みしま竹あかり」など多彩なイベントも開催し、都市住民との観光・交流を促進して、街並みに賑わいが再生しつつある。

歴史文化の発信拠点として設置した「三嶋曆師の館」では20人のボランティアの語り部の活動、伊豆や箱根の情報を提供するステーションとして総合観光案内所を建築。観光ボランティアガイドがキャッチガイドのため常駐するなど広範にわたり、市民の環境保全と自然へのふれあいが取り込まれ、観光案内所来訪者数では、事業前（平成12年度）33,371人から事業後（平成17年度）71,110人に増加している。第14回優秀観光地づくり賞にて、「金賞総務大臣賞」（社団法人日本観光協会）を受賞。